

〔日次紀事六月〕七日。祇園會〔中略〕凡自今夜至十八日夜四條河原水陸不漏寸地並床設席而良段  
也宮十九日下鴨社此月下鴨社司於川合社前住吉社東河邊修六月祇自今日諸人參詣爲納涼  
也擬菜或以竹串貫小團子數箇燒而賣之是稱御手洗團子社司盛此  
團子於臺而獻高貴家參詣人亦求之或蒲鉾金燈籠草買之賺兒女

〔都名所圖會〕四條河原夕涼は六月七日より始り同十八日に終る東西の青樓よりは川邊に床  
 を儲け燈は星の如く河原には床机をつらねて流光に宴を催し濃紫の帽子は河風に翩翩とし  
 て色よき美少年の月の明きにおもはゆくかざす扇のなまめきてみやびやかなれば心もいと  
 どきそひてめかれせずそゝろなるに妓婦の今を盛といろはへて芙蓉も及ばざる粧ひ蘭麝の  
 ごまやかに薫り南へ行北へ行淹茶〔どちま〕の店に休ふては山吹の花香に酔を醒し香煎には鴨川の流  
 れを汲んで京の水の輕を賞しかる口咄は晉の郭象にも勝れて懸河の水を注が如し物真似は  
 函谷關にもおとらぬかや猿の狂言犬のすまひ曲馬曲枕麒麟の繩渡は鞦韆の俤にして啾啾〔ちゅうちゅう〕の  
 聲かまびすく心太の店には瀧水溜々と流て暑を避硝子の音は珊瑚々と飮〔ちやう〕して涼風をまねく和  
 漢の名鳥深山の猛獸もこゝに集て觀〔みまの〕とし貴賤群をなして川邊に遊宴するも御祓川の例にし  
 て小蠅なす神を退散し牛頭天皇の蘇民將來に教給ふ夏はらへの遺法なるべし

〔在京日記 本居宣長〕寶曆六年六月十四日暮かたきよく晴ぬればこよひより始てすゞみあり三  
 條のわたりへ用ありてまかりしかばかべさに大橋へ出て川原のけしき見侍るに星の如くに  
 ともしび見えていとにぎはしかる事は江戸難波にもあらじと思ふましてさらぬるかな  
 どばさら也 十八日このすゞみの比はみやこの中のにぎはしきおもしろき最中也けらじす  
 すみも廿四日迄日延かなひ侍るよしこよひなどはわきてにぎはしく見ゆ 廿四日すゞみも  
 こよひかざりとかやことしは十四日夜よりはしまりてこよひ迄一夜もかけ侍らすさりけれ  
 共例より人もすくなかりしとかや是より又鴨の糺のすゞみ也 七年六月七日けふはひよ